

党籍剥奪後の陳独秀をどうみるか

張 巨 浩
小粥章司訳

＊（……）は筆者注，〔……〕は訳者注である。

陳独秀はわが党の歴史上、影響力のあった人物である。陳独秀をどうみるか、は歴史的な人物評価において依然として深く研究するに値する課題である。張巨浩同志は党籍剥奪後の陳独秀をどうみるかという問題について自己の意見を提起した。本誌は歴史的な人物評価の研究を推し進めるためにこれを掲載することにした。（編者）

党籍剥奪後の陳独秀をどうみるか。彼は結局われわれの敵なのか、それともわれわれの友なのか。彼はこれまで「^{トロツキストごろつき}托 匪」，「国民党の特務」，「日本漢奸」といわれてきた。陳独秀がわれわれの敵であることはすでにほぼ不動の事実であった。しかし、この数年来、何人かの同志がこれに対して疑問を投げかけている。陳独秀問題に対する研究が進むにつれて、私は陳独秀がわれわれの敵ではなく、少なくとも抗日を唱え、民主を求めた民主的人士の1人といえと考えるようになった。私のこの観点はまだそれほど確固としたものではなく、専門家および読者の御批判と御指摘を切に希望するものである。

一、漢奸説は成立しない

陳独秀を漢奸とする説は康生が言いだしたものである。彼は1938年1月28日および2月8日に延安の『解放』誌に発表した「日本侵略者の密偵・民族の公敵であるトロツキストを排除せよ」という文章の中で次のように指摘している。「九・一八事変〔1931年〕当時、上海にあった日本の諜報機関は親日派唐有壬の紹介を通じ、陳独秀・彭述

之・羅漢などが組織したトロツキストごろつき『中央』と協同作戦会談を行った。当時、唐有壬は日本の諜報機関を代表し、陳独秀・羅漢はトロツキストごろつきの組織を代表していた。会談の結果——トロツキストごろつきは、『日本の中国侵略を妨げず』，日本は陳独秀を始めとするトロツキストごろつき『中央』に見返りとして毎月300元の報酬を与え、効果を見てさらにそれを増額する——ということになった。この売国的な会談で、日本側からの報酬は陳独秀・トロツキストごろつき中央の組織部長羅漢が受けとり、中国のトロツキストごろつきおよびその頭目は日本侵略者の指示のもとに各方面でさまざまな役割を演じ、日本が中国を侵略するのを助けるというサル芝居をすることが決まったのである」。さらに1937年の「7・8月に……上海の日本の新聞がトロツキーは自らアメリカのトロツキスト分子一名を上海に派遣し、東方のトロツキスト組織の指導者とし」，「このアメリカのトロツキスト，グラス（中国名＝李福仁）は……陳独秀・彭述之・羅漢と連合して……，上海と華北にトロツキストごろつきと日本の諜報活動の組織を作った」。これ以後、わが党やその他の新聞・雑誌は陳独秀が漢奸であることを指摘し非難するようになったのである。

康生の陳独秀に対するこのような指摘は全国を驚愕させ、議論をまきおこし、武漢の新聞紙上で公開討論を行なうまでになった。1938年3月16日、『武漢日報』は傅汝霖ら9人の公開書簡を発表し、陳独秀のために異議を唱えた。その書簡はこう述べている。「陳独秀先生に漢奸・ゴロツキのぬれぎぬをかぶせるのは……情理に合わず」，「中傷するべきではない」⁽¹⁾。9人のうちの1人張西曼

はさらに単独で『新華日報』に手紙を書き、次のように述べた。「私はなぜ陳独秀先生の弁護をあえてするのか。私は彼の出獄後、数回にわたり彼を訪ねた。日本の侵略に対する彼の断固とした態度、および私が創設した中ソ文化協会の偉大な使命や中ソ両国が連合して東方の海賊〔日本〕を肅清することに対する熱烈な期待からみて、彼が少なくとも愛国的な学者であることが証明しうるのである」⁽²⁾。そこで『新華日報』は3月17・18・19日の3日間連続して短評を発表し、陳独秀がトロツキスト漢奸であるか否かは「陳独秀がトロツキスト漢奸組織から離脱し、トロツキスト漢奸としての活動に反対する公開声明を出すかどうかで判断せねばならず」、「もし彼が漢奸ごろつき分子と一緒にされるのを心よく思わないのであれば、トロツキスト漢奸組織から離脱することを公に率直に宣言し、実際上でもトロツキスト漢奸の活動に反対しなければならない」と強く指摘したのである。陳独秀は3月17日『新華日報』に一通の公開書簡を送り、翌日『掃蕩報』紙に掲載された。彼は次のように弁明している。「敵からもらった金銭で諜報活動を行ったというのが事実であれば刑事上の重大問題であり、トロツキスト漢奸組織から離脱し、漢奸活動に反対することによって事実を消し去ることは決してできない」、「漢奸であるか否かは証拠の有無で判断しなければならない」と証拠の提出を求めてきた。『新華日報』は3月20日、陳の来信についての短評を再び発表し、陳独秀が証拠の提出を求めてきたのを「無頼の口ぶり」と非難し、「モスクワで数回にわたり行われたトロツキストスパイ事件の中で、全世界に明らかにされたトロツキストスパイがドイツ、日本のファシスト特務機関のために働いていたという事実、日本の華北特務機関の工作大綱にトロツキスト分子を中国侵略の道具として利用したと書かれているという事実、王公度およびその他のトロツキストスパイが祖国を裏切り、日本のために尽

力していたという事実——に対して知らぬふりをしていると非難した。短評はさらに次のように強調した。「陳独秀は彼がトロツキストと組織的関係を持っていないことを声明したが、しかし今でもまだトロツキストの思想にとらわれている。まさにそのために彼はトロツキスト漢奸に断固反対する行動をとることを望まないのである。また、そうであるがゆえに、中国人民は陳独秀とトロツキスト漢奸と一緒に結びつけるのであり、理由がないわけではない」（傍点は筆者）。この見解によれば、当時陳独秀を漢奸としたのは一種のロジックによる推論なのである。それはトロツキストがスパイ組織であり、陳独秀のトロツキスト組織との思想上の境界が不明確であれば当然トロツキスト漢奸である。しかし彼が以後トロツキストと断絶することを決心しさえすればもはや漢奸ではないという。このことから漢奸説は証拠のないものと見るべきである。

当事者である羅漢も1938年4月24・25日、漢口の『正報』に公開書簡を発表し、次のように指摘した。——そのように重大な売国的会談で、しかも参加者に当時の政府の要人が含まれていながら、その結果は300円で売り渡すとはまったく安売りしたものである」、「私が日本の諜報機関から報酬を受けとったというあの年は獄中から出てきたばかりで、落ちぶれていた一年だった。あの年、私は上海の辣悲徳路の居酒屋の上に住んでいて、その居酒屋によく出入りしていた友人たちは少なからず現在でもれっきとした中国共産党員であり、彼らはあの当時の私の貧しい状態を証明することができるだろう。

さらに羅漢は次のように言っている。「康生君は去年の6・7月に私と独秀がアメリカの諜報員と相談したとっているが……でっちあげもいいところである。陳も彭もあの時まだ南京で獄中にあったという事実さえすっかり忘れている」、「私は1932年の秋から実際の政治生活から離れており、

滬蘇〔上海・蘇州〕付近の工場で働いていた。…仕事から離れたことはないし、まして南京へ行き独秀に会うことなどなかったのである。中共の少なからぬ私をよく知っている友人はみな私に代わってこの点を証明できるだろう」。羅漢の自己弁護は説得力があり、承認すべきものである。

羅漢の公開書簡が発表されたあと、新聞・雑誌は公開の回答をすることなく、この論争はうやむやのまま終わってしまった。陳独秀は知識人階層、政界に大きな影響力をもっていたが、人々に漢奸と言われ、また証拠をだすことができず、人心を失った。加えて国民党反動派は機に乗じてわが党を攻撃し、われわれをゆさぶった。康生はこれに対して、ずっと耳をふさぎ、一言も発しなかった。康生の陳独秀に対する指弾はまったく根も葉もないものとししか解釈できないのである。

羅漢は漢奸説にさらに反駁するために、公開書簡の中でわが党が彼および陳独秀と相談し、協力して抗日を行った経緯を明らかにした。1937年の「八・一三」の上海抗戦のあと、方法を講じて獄中の友人を救うために、彼は南京に来て、わが党の南京駐在の代表を探しだし、当局が政治犯を釈放するのを促すために援助を求めた。当時、李克農・葉剣英の両同志が彼を接待し、蔣介石に対して必要な人を指名するために名簿の提出を求めたのである。彼は深く感動し、自分がすでに政治活動から離れていることや、抗日の主張を李と葉に話し、共産党と連合して抗日のために尽力したいと提起した。葉と李は彼に延安（少なくとも西安）まで行くことを勧め、旅費と紹介状を与えた。羅漢は西安に行き林伯渠同志に会った。林はすぐに党中央に報告し、党中央は羅を延安に招くよう電報を打ってきた。しかし山津波のために行くことはできなかった。羅漢はわが党中央が提起した3項の条件に対してあえて自ら処理せず、武漢に帰ってから陳独秀に報告した。陳はすぐに党中央に直筆の書簡を送り、さらに7カ条の抗戦綱領を提

起し、羅漢自身が南京にいる博古と葉剣英同志にそれを手渡したのである。これらの過程の中で、彼は多くの党中央の指導者と話をかわしたが、これらの指導者はみな彼らに対して歓迎の態度で接したのである。1938年3月24日、葉剣英・博古・董必武の三同志が『新華日報』に発表した公開書簡は、抗日戦争初期にわが党がたしかに彼らと交渉を行ったことを実証している。もし、当時中央が陳独秀らを漢奸とみていたなら、決して彼らと交渉しなかったことは明らかである。

周恩来同志はかつて羅漢に対して自ら次のように述べている。——「いわゆる中国のトロツキストは実際上もまたかなり複雑であり、……大体四つの派に分けられる。一つは抗日に賛成するもので、あなたや陳独秀らはこれに属する……」⁽³⁾。これは当時の党中央の見方を代表している。1937年11月20日、延安の『解放』は「陳独秀先生はどこへ行くのか」という一文を載せた。それは党中央の態度をやはり反映したものである。文中で次のように指摘している。——「陳独秀先生が自由を取り戻したあと、みなは陳独秀先生を祝福して、彼が数年の牢獄生活の中で虚心に自己の政治的誤りを反省し、老戦士の精神をふるいおこし、再び革命の隊列に参加することを願った」。陳独秀を漢奸・特務と見たりすることはなく、彼は政治的誤りを犯したが、彼に対して強い希望を持っており、彼が革命の隊列に戻るのを歓迎していたのは明らかである。党中央が原則を堅持するという基礎の上に、陳独秀らをかちとめることは全く正しいことであった。ただ、王明・康生が帰国後かってに陳独秀を漢奸と決めつけ、責めたため、党の正しい政策の執行が破壊されたのである。漢奸説は彼らが無理強いしたものである。わが党はこれまでこれに関する正式の決議を行ったことはない。毛沢東同志は何度も陳独秀に言及しているが、すでに発表されたそれらの文章を見ても彼が漢奸であると明確に指摘したことはないのである。

陳独秀が漢奸か否かの問題は、彼の実践活動がすでに明らかな回答をだしている。

九・一八事変後、彼は当時現れた抗日愛国の高まりを熱烈に支持し、「日貨排斥と対日宣戦」の主張を提起したのである⁽⁴⁾。

1932年10月、陳独秀は捕らえられ入獄した。彼は蒋介石の法廷で国民党の無抵抗主義を怒りをこめて糾弾したのである。彼は次のように述べた。

「国民党は全国人民の膏血を搾り尽して兵を養い、全国に軍隊を擁して人民を統轄し、おのれに異を唱える者を殺戮し、日本の国土侵略に対して、終始本腰を入れて抵抗しない。そのうえ人民の抵抗を制止し、人民の組織を破壊し、人民の口舌を抑えつけ、『鎮静』させ、『沈着に対処』させる。即ち国民党の支配下で飼慣らされた羊とし、帝国主義に屈服し、むしろ全国が占領されようとも、異議・異説を唱える者の存在を許さないのである」。なんと強烈な愛国の情熱であろうか。なんと断固とした抗日の立場であろうか。彼は抗日の主張をさらに一步進んで提起した。「しかるに私は人民自らが組織と武装を拡大し、帝国主義に対して民族戦争を行い、もって東北問題を解決し、国家の独立を完成せんことを主張する」⁽⁵⁾。

彼は獄中で詩を作り、戦わずして逃亡した国民党将領を痛罵し、東北の抗日戦争の英雄を熱烈に頌えた。

「健児は委棄されて疆場にあり、

万姓は流離して半ば死傷す。

いまだ戦わずして先んじて逃げ、恬として恥じず、^{かいらん}回鑾の盛典は鋪張なること大なり」。

〔大意：意気盛んな若者たちは遺棄されて辺境の地にいる。たくさんの人々が離散して、死傷した者も多い。他方で戦闘もしないで逃走し、全く恥としない将領がおり、彼らが帰ってくると、盛大な宴がもよおされるのである〕。

「^{ねん}嫩江の血戦は強敵を驚かし、

愛国の男児は自ら主張す。

雪地冰天も誰れか^{おさえ}管得えん、

東風吹きて白間堂を暖む」。

〔大意：嫩江における激戦では、愛国的な兵士たちが果敢な抵抗を行って、強大な日本軍を驚愕させた。雪におおわれた凍てつく東北の地も押ええ得るであろうか。やがて風が吹いて主の帰りを待つ雪の東北を暖めるであろう〕。

1937年9月、陳独秀は出獄後「全幅の精神を抗日戦争のための文章に投入するようになった」⁽⁷⁾。

陳独秀が武漢での半年ほどの期間に発表した多くの文章や講演は、後に編集され、『抗日に対する私の意見』、『陳独秀先生抗戦文集』として出版された。

彼は抗日戦争は「被抑圧民族が帝国主義の抑圧と束縛に反抗した革命戦争である。戦争の対象は……日本帝国主義者であって日本人民ではない」⁽⁸⁾

と考えていた。彼は日本の一部の「社会主義者」が中国侵略戦争を擁護したことは裏切りであり、「略奪品の余りを労働者階級に分け与え、植民地半植民地の侵略戦争に加担させた。これはもともとヨーロッパのブルジョア階級御用のいわゆる

『社会主義者』の裏切り行為であり、日本の社会主義者もこれに習ったのである」⁽⁹⁾と批判し、「中国・朝鮮・日本の三国の人民を団結させ、協同して日本の帝国主義者を打倒する」⁽¹⁰⁾という主張を提起した。彼は投降派を激しく非難して、「われよしんば漢奸であるとしても」「投降の唯一の理論および事実の根拠は、中国は軍事的経済的力量において日本の敵ではない」が、「中国政府の手中にある軍事力および財政力の弱点は、全国民衆の奮起と全世界の革命的国家、革命的民衆（日本の民衆も含む）の援助によって補うことができる」と見なければならぬと指摘した⁽¹¹⁾。彼は全国民衆を動員して持久戦を行うという考えを提起した。即ち、「日本の対中国作戦は飛行機や大砲を用い、速戦速決、できるだけ戦争の範囲を拡大しないことが有利である。中国の対日作戦は全国民

衆を蜂起させ、抗戦を維持し、できるだけ戦争の範囲を拡大することにより、敵の軍勢力と財政力消耗させることが有利である」。さらに「今度の抗戦にはただ二つの前途があるだけである。途中で妥協し、日本に投降するのか、あるいは民衆を動員し、あくまでも抗戦するのか。自ら民族の利益を守ろうと思う者は、みな後者をとらねばならない」と述べているのである⁽¹²⁾。いったい、大漢奸からこのような言葉がでてくるものであろうか。

1938年5月、陳独秀は武漢を離れて重慶に赴き、ひきつづき抗日の論説を発表し、すぐに江津に移り住んだ。抗日戦争1周年の時、彼は次のような文章を発表した。「この1年は中国の歴史上、最も輝かしく、最も価値のある1年であった」、「1年の戦争を経て、大力士がついに病人を倒すことも、手向わせることもできなかったことにより、全世界の人々はみなこの大力士の実力が大したものではなく、病人もまた彼らが以前から想像していたほど容易に手なずけられない民族であることを目のあたりにしたのである」⁽¹³⁾。抗戦の翌年、日本軍はわが広大な国土を占領し、たけり狂い、全国民を悲観させた。このような形勢のもとで、侵略者を軽視する態度をとることはいかにむずかしいことか。彼はわれわれの勝利と敵の失敗を細く列挙した。そのねらいはもちろん人民の抗戦意欲を強化、鼓舞し、最後の勝利を奪いとるためであった。

陳独秀は江津県城に1年たらず住んだだけで、農村に移り住み、清貧な隠居生活を送った。陳独秀は身は山林にありながら、常に人類の運命と祖国の前途を気にかけていた。死に臨んで、彼はもしファシストが勝利するようなことがあれば、まさに人類の大災難であると悲痛に表明した。彼はこの前途を制止するよう人々に呼びかけたのである⁽¹⁴⁾。陳独秀は反ファシズム戦争に対してかなり濃厚な悲観的感情をもっていたが、死ぬまで反

日の立場を堅持していたことは疑う余地のないことである。「漢奸説」はまさに康生のたぐいがでっちあげた、人を罪に陥れる不実の言葉なのである。

二、トロツキスト説も具体的な分析を要する

大革命失敗の後、陳独秀は初めのうちはトロツキストのいくつかの観点に共鳴していたが、一歩進んでトロツキーを完全に支持するようになり、自ら「トロツキー同志の指導するコミンテルン反対派即ち真のマルクス＝レーニン主義の旗の下にしっかりと立ち、コミンテルンおよび中共中央の日和見主義者と決して協調したり、途中で妥協したりせず、最後まで奮闘しつづける」⁽¹⁵⁾。と公に宣言した。彼は「無産者社」という小セクト集団を組織し、1931年5月さらに他の小さなトロツキスト組織を連合して、いわゆる「中国共産党左派反対派」を成立させ、自ら中央書記の職務についたのである。入獄してからもまだトロツキストと一定の関係を保っていた⁽¹⁶⁾。これは陳独秀がトロツキストに参加し、重要な役割を演じていたことを説明しており、争えない事実である。陳独秀が党を分裂させ、プロレタリア階級を分裂させるという良からぬ役割を果たしたことは確かである。しかし、たとえそうであっても、この問題はさらに具体的な分析がなされるべきである。

第一に、陳独秀は一度はトロツキストに参加したものの、後になって自ら離れ、それに対して一定の批判的態度をとりつづけた。

1937年11月21日、陳独秀は陳其昌らにあてた書簡の中で次のように指摘した。「私はただ自己の独立した思想を重視しているのであり、いかなる人の意見にもかかずらうものではない。私がここに発表する意見は、すでに人々に広く声明してきたように、私個人の意見であり、いかなる人をも代表するものではない。私はもういかなる党派にも属しておらず、いかなる人物の命令も指図も受

けず、自らの責任で主張しているのである」。彼が実際に発表したものはトロツキストとは異なっている。『解放』誌はかつてこう指摘した。「陳先生は出獄後、武漢での初めての講演の中で、こんどの抗戦は革命戦争であり、全民衆は政府を助けなければならない、世界も中国を助けるべきである……と述べた。これは中国のトロツキストの主張と全く異なっている」⁽¹⁷⁾（傍点は筆者）。陳は1938年3月に『新華日報』にあてた公開書簡の中で再度次のように強調した。「私は南金で葉剣英と会談した時、こう声明した。私の意見は陳独秀以外の何者をも代表するものではない。……武漢に来てから今日までずっとこのような態度をとりつづけているのは、抗戦の混乱をさけるためであり、いまだいかなる党にも参加せず、自ら出版物を出すこともない。私の全ての意見は、各党各派の出版物に送り発表している」。『新華日報』も3月20日の短評の中で、陳独秀がトロツキストから離れたということを肯定している。短評はこう述べている。「かつては中国トロツキストの首領の地位にあった陳独秀が、現在いかなる党派にも参加していないと声明している。これはもちろん彼が現在ではすでに……トロツキスト組織から離脱していることを意味するものである」。陳独秀の出獄後、「少なからぬトロツキストごろつき分子たちは陳独秀にトロツキスト組織をとりまとめるよう求めたが、陳の回答は『各自それぞれの道を進め』というものであった」⁽¹⁸⁾。1938年の夏、彭健華同志が陳に対して、彭述之・鄭超麟が出獄したあともトロツキストをつづけるかどうかを問うた際、陳はこう答えた。「彭述之は決して教訓を受け入れるものではなく、いまだにつまらないことをやっている。はからずも鄭超麟も彼について上海へ行き、続けてやるようだが、それは彼らの勝手である」⁽¹⁹⁾。劉仁静も彼自身かつて陳独秀を尋ねたことがあるが、「陳は事前を書いておいた手紙を婦人から私に手渡させ、自分がトロツ

キストではなく、トロツキストに関係のある人と
の交際を望まず、私にも会いたくないと表明した」⁽²⁰⁾
と述べている。「1939年から1940年までの間、トロツキーは陳独秀に書簡を送り、出国してアメリカへ行くように勧めた」が「彼はやはり拒絶した」⁽²¹⁾。1939年3月21日、トロツキーは李福林にあてた書簡の中で確かに「私は彼（陳独秀を指す）がアメリカでしばらく過すのが一番よいと常に思っていた」⁽²²⁾と言っている。しかし、陳独秀がアメリカへ行かなかったことも事実である。

これまで述べたことをまとめると、陳独秀が組織上トロツキストから離れていたことは信ずべきことであり、また政治的主張においてもトロツキストとはかなり異なっていた。1939年、陳独秀は中国のトロツキストに痛烈な批判を行った。彼はトロツキストを指して次のように述べた。「もともと極左の傾向がある。たとえば……一部の人は民族民主闘争はブルジョア階級の任務であり、プロレタリア階級は運動に参加してもよいが、それは自身の任務ではないと思っている。彼らは同志のなかで中国のプロレタリアートは民族民主の任務をになわなければならないと主張する人を左派ブルジョア階級の意識をもつ人であると攻撃している。また一部の人はいかなる時期、いかなる事件、いかなる条件のもとであっても、他の階級の党派と協議し、外国の帝国主義あるいは国内の独裁者に対して共同の行動をとることは全て日和見主義であると考えている。こうした極左の傾向は……中日戦争に対する態度全般を決定している」。「これらの極左の人たちは口では抗戦に参加するといいいながら、逆に抗日戦争の意義を高く評価することに反対している。彼らの意見あるいは認識では国民党支配に反対する戦争のみが革命的であって、日本帝国主義に反対する戦争は革命的ではないのである。またある人は『愛国』という言葉をあざ笑い、さらに、こんどの戦争は蔣介石の日本の天皇に対する戦争であると考えている人さえ

いるのである。ある人は労働者が戦争に参加するのはブルジョア階級に代わって犠牲になることだと考えている。彼らは共産党や国民党に対して共同して抗日をするように交渉しようとするのは誰であれ、墮落・投降と考えているのである。大衆の目にうつる『トロツキスト』は抗日の行動をせず、毎号の機関紙に満載された中国共産党および国民党を攻撃する文章なのである。……開戦から現在に至るまで、この様な状況はいぜんとして続いているのである」。最後に結論としてこう言っている。「このような閉鎖主義の極左小集団（この点に同意しない者はきわめて少ない）では、もとより発展する望みはない。かりに発展できたとしても、かえって中国革命の障碍になるであろう」⁽²³⁾。この結論は全く正確なものである。

ここで指摘しなければならないことは、陳独秀は思想・理論上、決してトロツキストと完全に断絶しているわけではなく、とりわけトロツキーをずっと信頼してきたということである。

第二に、陳独秀がトロツキスト活動をしていた時、当時のトロツキストはまだ人民内部の矛盾に属するものであった。

トロツキストは始めから反革命的性質をもっていたわけではない。「トロツキーのグループはもとともロシアの労働運動の中の、レーニン主義に反対した分派の一つであり、後に墮落して完全な反革命ごろつき集団になったものである」⁽²⁴⁾。1927年以前にはトロツキストは党内の問題であった。1927年10月、ロシア革命記念日に彼らがデモンストレーションを組織したため、しだいに矛盾に転化し、党外問題となったのである。同年12月に開かれたソ連共産党（ボ）第15回代表大会で、トロツキー、ジノヴィエフおよびその他のトロツキスト分子は党を追われた。大会が閉幕した後、党を追われた人たちは反対派を離脱する声明書を差し出し、党籍回復を要求した。これに対して、ソ連共産党（ボ）中央は彼らに、トロツキズムに反対

することを公にすること、党の政策を承認すること、党の決議に従うことなどを含む党籍回復の4条件を提起した。この4条件のもとでジノヴィエフを含む圧倒的多数の人々が党籍を回復した。これは当時のトロツキスト問題が党外問題に属してはいるものの、敵対問題ではなかったことを物語っている。

トロツキーのグループが敵対矛盾になったのは1936年以後のことである。したがって、陳独秀のトロツキスト問題を考えるにあたっては具体的な分析をしなければならないのである。

時間的に見ると、陳独秀がトロツキスト活動をしていた時期は、トロツキーのグループはただ労働運動の中の反レーニン主義の政治分派にすぎなかった。特に注意すべきことは、当時の中国のトロツキストはまだ反帝・反国民党反動派の旗じるしを放棄してはいなかったことである。彼らはコミンテルンに反対し、党に反対しながらも、路線闘争の旗じるしをかかげていたのである。陳独秀はこう指摘した。「わが党——中国共産党——指導者のスターリン派の誤った政策は革命を遅らせ、さらには革命を圧殺した。……しかし、共産党は全てのプロレタリア階級の先鋒隊であり、また全民族の指導者でもある。革命的民衆は党の指導者の誤りを理由として彼に対して全面的に反対すべきではなく、党の指導機関の誤りを積極的に正さねばならないし、さらには党を改造しなければならない。これによってわれわれのゆく手の困難を取り除くことがわれわれ左派反対派の立場なのである」⁽²⁵⁾。陳独秀はさらにこう指摘した。「今の国民党が敵視するものは、帝国主義に非ず、軍閥官僚に非ず。即ち徹底して帝国主義に反対し、軍閥官僚に反対し、終始最も徹底して民族民主革命に努力する共産党員なり。日本帝国主義のまさに山海関を奪取し、熱河を急攻せんとするも、国民党の軍隊は、かえって江西に集中せり。それは共産党に対処するものなり。これを殺し、これを囚

うもなおもって未だ足らずとす。さらに袁世凱の故智に習い、威力をもって強要し、利益をもって誘い、自首密告を奨む」⁽²⁶⁾。ここで明らかにされたのは、陳独秀がトロツキストといわゆるスターリン派を共に共産黨員と見ており、国民党反動派が江西の紅軍を攻撃したことに明確に反対したことである。陳独秀は敵味方の根本的立場の問題においてはやはり正しかったと言わねばならない。したがって、当時のトロツキストは反革命的性質をもつものではなかったのである。

国民党反動派のトロツキストに対する態度もこの点をはっきりと証明している。中国のトロツキストが1931年5月に連合（実際は四分五裂のまま）したが、蔣介石集団はすぐ同月・8月および翌年10月に続けて3回の大規模なトロツキスト狩りをやり、トロツキストの中心的分子をほぼ一網打尽にし、逮捕された者の中には13年におよぶ懲役刑を言い渡された者もいる。当時、ある人は国民党がトロツキストを逮捕したのは苦肉の策を演じたのであり、「解消派と某党はすでにさらにかたい握手をかわしており、解消派はすでに明らかに某党の懐におさまっている」と述べている⁽²⁷⁾。このような認識は正しいものではない。数度におよぶ逮捕がトロツキストに重大な打撃を与え、これ以後トロツキストは半身不随状態になったというのが、実態である。蔣介石がトロツキストを逮捕したのは、彼の支配をおびやかしたからである。

国民党は陳独秀に対する「起訴状」の中で次のように指摘している。「中共反対派名義で発表された政治決議案『当面の時局とわれわれの任務』を精読し、その要旨をまとめると、……国民党政府の威信は地に堕ち、大衆を指導できなくなっている。武装暴動をするために農民・労働者およびプロレタリア階級を指導し、労農軍を組織し、ソヴィエト政権を樹立しなければならない……というものである」。さらに「陳独秀が個人名義で発表した「中国はどこに行くのか」や「メーデーを

記念して労働者の友に告ぐ」では三民主義を反動主義と決めつけただけでなく、第三次革命を主張し、断固として国民党政府を打倒し、革命的民衆の政権が国民党政権にとって代わることを主張した。民国をおびやかそうとする意図はもはや明らかである」。トロツキストは陳独秀が逮捕された時発表した声明の中でも国民党政権をくつがえすよう呼びかけている⁽²⁸⁾。

国民党反動派のトロツキストに対する鎮圧は、当時のトロツキストはまだ国民党反動派の悪事に同調しておらず、反革命組織になっていないことを示している。後になってトロツキストはさらに分裂し、ある者は国民党特務となり、ある者は日本の漢奸となったのである。しかし、その時陳独秀はすでにトロツキストから離れていたのである。

党籍剥奪後の陳独秀は抗日に力を入れただけでなく、一貫して蔣介石国民党の反動的支配に反対もしたし、わが党に対して敵対する態度をとったこのもなかった。これは全て事実にもとづくものである。

第一、逮捕され、入獄した後も気概をなくさなかった。

国民党反動派は一方で陳独秀を監獄に入れ、重刑に処し、もう一方では獄中で各種の優遇を与えるという硬軟両様の手段を用いて投降をせまった。しかし、陳独秀は国民党政権を打倒するという政治的立場を改めることはなかった。国民党の公開裁判の法廷で陳独秀は「四方をみわたし、泰然自若」としていた。裁判長が彼に「逮捕された10人のうち何人知っているか」と尋ねたところ、彼は断固としてこう答えた。「政治犯として、詳しく報告し、政府のスパイをすることはできない。個人の事しか報告するわけにはいかない」⁽²⁹⁾。陳独秀は5年間拘留されたが、組織と同志を売り渡したという事実はみつからない。

さらに裁判長は陳に「なぜ国民政府を倒そうとするのか」と尋ねた。これに対して、彼は理路整

然と意気盛んに次のように答えた。「それは事実であり、否定はしない。理由は三つあり、簡単に説明すると、(1)現在の国民党政治は銃剣政治であり、民主政治の政治原則に合わないこと。(2)中国人民の窮乏は極に達しているのに軍閥官僚は金銭を集めて帝国主義の銀行へいれるを知るのみであり、人民は飯も食えないほどの困難にみまわれ、まさに朝鮮滅亡時のありさまである。(3)全国の人民が抗日を主張しているのに、政府は逆に一步一步後退している。十九路軍が上海で抗戦したとき、政府は支援しなかった。いわゆる長期抵抗は長期抵抗の4字にすぎず、終始抵抗はしなかったのである。以上の3点にもとづき、人民はこの民主主義にそむき、民権の実質のない政府に反抗する義務があるのである」⁽³⁰⁾。弁護士章士釗が陳独秀を弁護して、陳は国民党政府に反対しているのではないと述べた時、陳独秀はすぐに起立して、「私の政治的主張は、章弁護士の弁護を根拠とすることはできない」⁽³¹⁾と声明したのである。

陳独秀は国民党反動派がむりやり彼になすりつけた罪名を論駁するために、有名な「弁訴状」を書いた。まず彼は自分の戦いの一生を概括的に紹介している。「私は現在55歳である。弱冠より帝制に反抗し、北洋軍閥に反抗し、封建思想に反抗し、帝国主義に反抗してきた。中国を改造するために奔走し、叫び続けて30有余年になる。前半期は『五・四』以前の運動であり、知識分子の方面を専らとした。後半期では労働者・農民など勤労人民の方面に転じて活動した。というのは、第一次大戦終了後、世界革命の大勢および国内状況が私にこの転換を余儀なくさせたからである」。つづけて彼は共産主義の偉大な理想と党の反帝・反封建主義の民主革命綱領（いうまでもなく、彼が「国民立憲会議」を綱領として宣伝したことは誤りであった）を正確に宣伝し、そのために奮闘する決意を表明した。彼は「私のこれまでのあらゆる行為は自らの意志であり、現在および将来のあ

らゆる行為もまた自らの意志である。『鞠躬尽瘁して、死してのち已む』『懸命に心を尽くし、力を尽くして、死ぬまでやめない』の志である。息のある限り、私は全国人民が外国の帝国主義および自国の専制君主の二重の圧迫のもとで泣き叫んでいるのを目撃しながら、挺身奮闘せずにはいられない」と述べた。そして本当の罪人とは国民党反動派であると指摘して次のように述べた。「私はもとより罪なく、中国民族の利益を擁護し、大多数の勤労大衆を擁護したために国民党により罪に陥れられたにすぎないのである」。

最後に彼は国民党の公開裁判の猿芝居の欺瞞性を訴えている。「君たちは今、権力を手にして、異端を迫害しており、その勢力は他者を圧倒してまことに強大である。私は民族のため、民衆のために一切の犠牲を甘受し、天下の後世の評価を待つのみである。もし強権の外にあって、再びいわゆる法律を借りて人を罪に陥れ、『叛国』『国にそむき』、『危害民国』『民国に害を及ぼす』などの冤罪をきせるようなことがあれば、私は1分間たりとも呼吸を止めずに、声高に抗議するであろう」。陳独秀の「弁訴状」には全篇にわたり、権威と武力に屈しないで、最後まで革命をやりぬく浩然の気が充満しているのである。

国民党のあらゆる投降のさそいに対して、陳独秀は心を動かさなかった。国民党軍政部長の何応欽はかつて陳を官邸に招いて接見し、陳に題字を所望した。陳独秀は「三軍可奪帥也、匹夫不可奪志也」⁽³²⁾〔三軍も帥を奪うべきなり。匹夫も志しを奪うべからずなり。（大軍でも、その総大将を奪い取ることはできるが、一人の男でも、その志しを奪い取ることはできない。）——『論語』子罕、岩波文庫より〕と書いて彼に返礼した。

陳独秀は法廷を戦場とただけでなく、監獄を革命に対する自らの意志を鍛える場とみていた。

自来亡国には妖孽多し

一世の興衰は眼明を過ぐ

幸いに艱難あるも能く煉骨す

依然として白髪の老書生なり⁽³³⁾

〔大意：昔から国家の滅亡は妖孽（奸臣）がなせるものである。一世の榮枯盛衰を回顧すれば、このことは明らかである。幸にも私の前には困難がたちはだかっており、私を鍛えなおそうとしている。私は白髪の人となつたが、依然として一書生として学問に励んでいる〕。

結局、陳独秀は5年間牢に入れられたが、国民党反動派の足元にひざまづいたり、気慨を失うことはなかった。したがって、釈放されたのは、抗日戦争時の国共合作により、わが党が蒋介石に政治犯の釈放を強く迫った結果に外ならない。彼は實際上、党が策を講じて出獄させたのである。

第二、陳独秀の蒋介石に対する恨みは骨髓に徹していた。

陳独秀は獄中で西安事件の消息を知ると、絶対に蒋介石を殺すべきだと大いに喜んだ。彼は酒と肴を買ってきてもらい獄内の友人らと共に祝賀した。「彼はこう言った。『私は普段酒を飲まないが、今夜は国の仇、家の恨みのために痛飲しよう』。彼はまず一杯酒をつぎ、それを高く挙げ、大革命以来共産主義のために犠牲になった烈士諸君、一杯受けてくれ、諸君の恨みは報われたぞと述べた。そして地面に酒をそそいだ。彼は2杯めをつぎ、嗚咽しつつ延年および喬年にこの一杯をささげると言った。あとは涙があふれ、慟哭のあまりに声もでないほどであった。われわれは彼が大いに笑ったり、大いに怒るところは見たことがあったが、涙を流すところを見たのは初めてであった」⁽³⁴⁾。これは彼の心の底からの感情の発露とみることができる。

陳独秀が出獄した後、「当時、胡適・張伯苓・周佛海らは陳独秀を国防参議会へ入れようと考えたが、彼はかたくなに拒んだ。彼は、蒋介石はわれわれの多くの同志を殺し、自分の2人の息子を殺しており、共に天を戴くことはできない。また、

現在、大敵は国共合作をしており、国家に彼をして抗日のための抗日のための合作を行わしむる必要がある以上、それに反対しないまでである」⁽³⁵⁾と述べた。

濮清泉は陳独秀の出獄後を回想してこう言っている。「蒋介石はかつて陳独秀に人を遣わし、労働部長にでもなるよう勧めたが、陳は断固拒否した」「同時に陳は高語罕が蒋介石に会いに行ったことを恥知らずと罵った」⁽³⁶⁾。陳独秀は死ぬまで蒋介石に加担することなく、ずっと国民党の秘密の監視下におかれていたのである。

第三、陳独秀は党内へ戻る希望をもっていた。

陳独秀は出獄後、自発的に党の組織を探し、党に復帰して、延安へ行かせてくれるよう要求した。葉剣英・博古・董必武の3人の公開書簡はこの点を証明している。書簡には次のように記されている。

「9月初旬、陳氏は出獄後、羅漢に托して自分が党の指導下に戻り、仕事をする用意があることを伝えてきた。われわれは陳が中国トロツキストの頭目であったという、事の重大性に鑑みて、中共中央との協議にしたがって、羅漢に委嘱して陝北へ行かせることを決定した。羅漢が南京を離れてから、陳はまた李××先生に托して、自分はすでにトロツキストと決裂しており、できるだけ早く会いたいと伝えてきた。われわれは陳が政治的立場を公に表明していない以上、認めるわけにはいかなかった。李××先生は、陳氏はわれわれに政治的立場を明らかにしたいと望んでいると言ったため、博古と葉剣英が陳氏に会うことにした。……陳は抗日統一戦線には賛成したが、トロツキストに対する態度は明確に示さなかった。会見後、陳は再び人を介して、李××が同席していたので、忌憚のない会話ができなかったと伝え、葉剣英にもう一度彼に会うことを求めてきた。会見の時、葉剣英は陳に対して次の3点を全国に表明するよう求めた。それは抗日戦争に対する態度、民族統

一戦線に対する態度、およびトロツキストの理論と行動に公に反対すること、の3点である。しかし、結局陳は表明しなかったのである」。

彭健華が1938年の夏、陳独秀に面会したとき、当時の情勢をどう見るか尋ねたところ、「彼はすぐ興奮して、党の路線と政策は完全に正しい、…私は断固支持すると述べた」。「彼はとても意欲的で」、「彼は南京の監獄での数年間に、深く反省し、自覚したことは明らかである」⁽³⁷⁾。

この後、とくに彼の生前の最後の数年間は、理論上、路線上、党と原則的にくいちがっており、また、党を攻撃する文章をいくつか発表したものの、政治上では党を敵とすることはけっしてしなかった。このため、「張国燾は延安から逃亡したあと、再び別の党を組織するために、陳独秀にその看板を支持するように誘ったが、陳は同意しなかった。譚平山も陳独秀を訪れて第三党を組織しようとしたが、陳は『その意志はない』と言った」⁽³⁸⁾。

これまで述べてきたことをまとめると、陳独秀は党籍剥奪後、トロツキストと結んで、トロツキスト組織の指導者の1人になり、党を分裂させ、プロレタリア階級を分裂させた。しかし、彼がトロツキストに参加していた期間は短く、すぐに逮捕され、入獄させられた。出獄後はすぐにトロツキストを離れた。一貫して抗日の立場を堅持し、党の抗日民族統一戦線政策をほぼ擁護しており、蒋介石の悪事に染まることなく、党に対しても愛着をもっていたのである。これらいくつかの要因を考慮すれば、陳独秀は少なくとも民主的人士の1人とみることができるのである。

〔原注〕

- (1) 9人のうち林庚白はこの書簡に対して責任を負わないと声明した。『新華日報』1938年3月18日付を見よ。
- (2) 『新華日報』「来函照登」1938年3月18日。

- (3) 「羅漢致周恩来等公開信」漢口の『正報』1938年4月24日・25日。
- (4) 「此次抗日救国運動の康莊大道」、『火花』第3期に掲載。『陳独秀評論』114頁から引用。
- (5)(26) 『弁訴状』（1933年2月20日）。
- (6)(33) 『金粉淚』（1934年）。
- (7) 陶亢德「関于実庵自伝」、『古今』1942年第11期に掲載。
- (8)(11) 「抗日戦争之意義」（1937年10月6日）。
- (9)(10) 「告日本社会主義者」1938年8月）。
- (12) 「準備戦敗後の対日作战」（1937年冬）。
- (13) 「抗战一年」（1938年7月7日）。
- (14) 「戦後世界大勢之輪廓」，「再論世界大勢」および「我的根本意見」を参照のこと。
- (15) 「告全党同志書」（1929年12月10日）。
- (16)(34)(36) 濮清泉「我所知道的陳独秀」雲南工学院印刷。
- (17) 「陳独秀先生向何处去？」，『解放』1937年11月20日付に掲載。
- (18) 黄綱鑑「中国托匪組織前期歴史概況」，中国革命博物館党史研究室編『党史研究資料』（15）より引用。
- (19)(37) 彭健華「回憶和陳独秀的兩次会晤」，『党史資料』叢刊1980年第一輯を見よ。
- (20) 「劉仁静談托派問題」（1979年），『党史研究資料』（15）から引用。
- (21) 周仁生「中国早期托匪情况之三」，『党史研究資料』（15）。
- (22) 林茂生編『陳独秀問題參考資料』中国人民大学1964年版。
- (23) 「陳独秀致托洛茨基的信」（1939年）。
- (24) 『毛沢東選集』152頁注〔30〕。
- (25) 「誰能救中国？ 怎樣救中国？」，『先鋒』第5期（1932年11月17日）に掲載。
- (27) 「托陳取消派首領陳独秀被捕之意義」，『大衆評論』創刊号に掲載。（64頁へつづく）